

## 「新潟次郎」

### 【品種の特徴】

- 「こしいぶき」に比べ、出穂期及び成熟期は7日程度早い極早生のうるち種。
- 耐倒伏性は強。
- 穂発芽性は中。
- いもち病ほ場抵抗性は、葉いもちは中、穂いちはやや弱。

### 【生育のめやす】

生育ステージ	葉数 (葉)	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD)
最高分けつ期 (6月28日頃)	9.5~10.5	52~58	550~580	41~43
幼穂形成期 (7月1~3日頃)	10.5~11.5	60~64	520~550	41~43
2回目穂肥時 (7月6~10日頃)	11.5~12.5	70~75	440~490	40~42
出穂期 (7月21~24日頃)	12~13	稈長82	410~450	38~40

### 【収量構成要素及び品質のめやす】

目標収量	700kg/10a
穂数	410~450本/m <sup>2</sup>
一穂粒数	90~96粒
m <sup>2</sup> 当たり粒数	39,000~41,000粒
登熟歩合	80%
千粒重	21.5~22.5g

### 【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

時期	4月		5月			6月			7月			8月			9月	
	20		10	20		10	20		10	20		10	20			
主な作業と生育ステージ	は種	田植え			中干し			穂肥	幼穂形成期	穂肥	出穂期			落水	収穫	成熟期

基肥施用
<ul style="list-style-type: none"> <li>・基肥量は窒素成分で7kg/10aをめやすとし、地力に応じて減肥する。</li> <li>・大豆跡は原則として基肥を施用しない。</li> </ul>

田植え
<ul style="list-style-type: none"> <li>・田植えは5月上旬に行う。</li> <li>・栽植密度は60株/坪以上とし、1株苗数は3~4本とする。</li> <li>・鳥害を回避するためほ場の団地化を図る。</li> </ul>

中干し・溝切り
<ul style="list-style-type: none"> <li>・中干し・溝切りを実施し、一度田面を固めて収穫時の機械作業が可能な地耐力を確保する。</li> <li>・中干し後、出穂前は稲体活力が低下しないよう、土壌を乾かさないようにする。</li> </ul>

病虫害防除
<ul style="list-style-type: none"> <li>・葉いもち防除は、必ず育苗箱施用により行う。</li> <li>・穂いもち防除は、予防防除を行う。</li> <li>・斑点米カメムシ類の防除は、草刈り及び加害種に応じた薬剤防除を行う。</li> <li>・出穂が早いので雀害対策を適宜行う。</li> <li>・飼料用米の農薬使用にあたっては、農作物病虫害雑草防除指針に基づき正しく使用する。</li> </ul>

穂肥施用
<ul style="list-style-type: none"> <li>・穂肥は出穂期25~23日前(幼穂形成期頃)と14日前の2回に分けて施用する。</li> <li>・1回目は、幼穂長を適時確認して施用時期が遅れないよう注意する。</li> <li>・1回の穂肥量は窒素成分で3kg/10a、合計6kg/10aをめやすとする。</li> <li>・穂肥施用時の生育がめやすを大幅に超える場合は、施用量を控える。</li> </ul>

収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> <li>・収穫適期は黄化粒割合が85~90%になった頃であり、積算温度1,000℃をめやすとする。</li> <li>・胴割粒の発生を防止するため、乾燥は適正温度で行い、急激に乾燥させない。</li> <li>・必要に応じてくず米を適切に除去する。</li> </ul>